

初期ハイデガーの解釈学

——自己理解とテキスト解釈の交差——

内藤 麻央

一 解釈学の主題は何か

一般に解釈学の主題といえば「テキスト」であり、多義的で解釈を必要とする「書かれた言葉」である。「解釈学」という語の意味は歴史的に変遷し、様々な思想家・哲学者によって異なる定義が与えられているが、解釈学とテキストとの本質的な関連性は自明なものとして一般に認められている。「本来の解釈学的課題は、書かれたテキストに対して立てられる」(ガダマー)のであり、「解釈学とは、テキスト解釈と関連した理解の理論」(リクール)⁽¹⁾などである。ではハイデガーの場合はどうだろうか。

ハイデガーは解釈学の主題が「テキスト」であるとは決して言わない。『存在と時間』で述べられているように、ハイデガー解釈学の主題は現存在なのであり、「現存在の解釈学」は「実存的分析論」なのである(vgl. SZ, 37-38)⁽²⁾。『存在論(事実性の解釈学)』でも「解

釈学」という用語は、事実性への導入、接近、問い、解明の統一的方法を告示すべきである」(GA63, 9)⁽³⁾と述べられている。ハイデガー解釈学の第一義的な主題は「現存在」、「実存」、「事実性」なのであり、つまりわれわれ自身の存在なのである。

そもそも「解釈学」(Hermeneutik)という語はハイデガーにおいては独特の意味で理解されている。ハイデガーは「解釈学」という言葉をギリシア語の語源的意味にまで遡って、17世紀の聖書解釈学やシュライエルマッハーに端を発する近代解釈学とは異なる意味で理解しようとしており、「解釈学」とは、「解釈についての学説」や「理解の技術」ではなく「ヘルメーネウエイン(伝え知らせること(Mitteilen))の遂行」(GA63, 14)を意味すると言われる。ハイデガーの解釈学とは、解釈についての学ではなく、解釈することそのものの、つまり解釈作業を意味するのであり、それはテキスト(あるいはテキストの背後にある著者の生)という特定の対象を理解するための技術なのではない。初期ハイデガーの解釈学は、われわれ

自身の生き生きとした存在を根源的に問うために要請された方法であり、それは問いの主題であるわれわれ自身の固有な在り方に応じた方法として構想されたものなのである。

ここで本論の方針を示すためにも一言断っておきたいことがある。

「現存在」、「実存」、「生」、「事実性」といった様々な用語で呼ばれるこの「われわれ自身の固有な存在」を問うための方法としてのハイデガー解釈学を、本論では「自己理解の方法」として捉えることにする。「自己」ないし「自己性」という概念は『存在と時間』で特定の意味で用いられており (vgl. SZ, 316-323)、「現存在」や「事実性」とは術語として区別されるべきであるため、この解釈はハイデガーのテキスト内在的には問題があるかもしれない。しかしながら、ハイデガーに限定されない、より一般的な視野でハイデガー解釈学をとらえ、またハイデガー哲学の強力な引力から離れて批判的考察をするために、あえて特定の哲学的含蓄が付与されていない形式的一般的な意味において「自己理解」という言葉をつかうことにする。

さて以上論じてきたように、ハイデガーが「解釈学」という語に与えた定義に即して言うとき、さしあたり、「解釈学とはわれわれ自身の固有の存在を問うための自己理解の方法である」と規定することができ。奇妙なことにここには解釈学とテキストとのつながりは見えてこない。だがハイデガー解釈学がテキスト解釈とは本質的には関係しないかというとき、決してそうではない。ハイデガーの解

釈学が生き生きとしたわれわれ自身の存在を問うための方法であるということは確かであるが、それはテキスト解釈を通じて遂行されるのである。このことはハイデガーの思想に少しでも親しんでいる者にとっては自明の事柄に属すが、そこには初期ハイデガー哲学の根本性格、あるいは哲学そのものの意味に関わる重要な問題がひそんでいる。実際ハイデガーの解釈学的考察の実際の遂行を見れば、彼がアリストテレスを中心とした古代ギリシア哲学やアウグスティヌス、デカルトなどの哲学の古典的文献の解釈を通じて自らの思索を展開していったことは明らかである。ハイデガーの哲学は過去の哲学者のテキストの解釈と切り離すことができないのである。

ハイデガーは一九二一／二二年冬学期講義『アリストテレスの現象学的解釈／現象学的研究入門』において、哲学とは何かということ（哲学の定義）、そして生や世界の根本カテゴリーについて論じた後で次のように述べている。「この序論は、具体的アリストテレス解釈抜きにしては何物でもなく、アリストテレス解釈抜きではせいぜい哲学についてのひとつの誤解であるにすぎない」（GA61, 112）。

ハイデガーにとってアリストテレス解釈は哲学することにとって非本質的で付随的なものではない。生や世界を哲学的に問うということとテキストを解釈することは軌を一にする試みなのである。本論はこれをハイデガー解釈学の根本的な特徴として捉え、そこに焦点をあわせて考察を進めていく。以下では、なぜわれわれ自身の存在への問いとしての自己理解とテキスト解釈とが本質的に関連する

のかという問題について詳しく論じていくことにする。

二 伝統の批判的解体としての解釈学

これまでハイデガーにおける「解釈学」の主題とその基本的な意味について論じ、それを自己理解の方法として捉えるということを書いてきた。そしてハイデガーにおいて自己理解としての解釈学が同時にテキスト解釈であるということを問題として取り上げた。この問題に取り組むために、まず初期ハイデガー哲学の方法の全体像をとらえておく必要がある。

ハイデガーの根本的な方法概念には「現象学」、「解釈学」、「形式的告示」の3つがある。そして、これら3つの方法概念はそれぞれ独立したのではなく、相互に密接に関連している。たとえば現象学と解釈学との結びつきについては、『存在と時間』の序論で「現象学的記述の方法的意味は、解釈するということ (Auslegung)」（SZ, 37）であり、「現存在の現象学」は「解釈学」（Hermeneutik）であると述べられている。そして「形式的告示」（formale Anzeige）は、『存在と時間』期までのハイデガーの思索を導く非常に重要な方法概念であり、「事実性の解釈学」は「形式的告示的解釈学」（formal anzeigende Hermeneutik）とも呼ばれている。また一九二二年夏学期講義では、「現象学的解明にとって主導的となるであろう意味の方法的使用を、われわれは『形式的告示』と名付

ける」（GA60, 55）ともいわれている。ハイデガー哲学の方法は、これら3つの方法概念の相補的で有機的な関連において成立しているのである。したがって、ハイデガーの解釈学について中心的に論じる場合でも、現象学と形式的告示という他の二つの方法概念の理解を欠かすことはできない。しかしながら、「現象学」については『存在と時間』の中でも明確な定義がなされているのに対して、「解釈学」と「形式的告示」については体系的統一的な定義が与えられてはならず、これらの方法概念がどのように関係しているのかということは必ずしも明らかではない。ハイデガー哲学の方法を全体的包括的に理解するためには、これらの方法概念それぞれの意味内容を明確化しつつ、それらの関係性をとらえることが重要であると考えられる。とはいえ本論はハイデガー解釈学の批判的検討によって自己理解としての哲学の可能性を探ることを課題にしているので、この課題を遂行するのに必要な限りにおいてこれらの方法概念の関係性について言及するにとどめたい。

では以上のことを踏まえた上でハイデガー解釈学における自己理解とテキスト解釈との交差という問題に取りかかろう。ハイデガーは生涯にわたって数々の過去の哲学者の思想を取り上げながら自らの思索を展開していった。あるときは単純な否定や受容、そして批判的対決という仕方で、あるいは過去の哲学者に仮託して自らの思想を語るために、また忘却されていた問いを反復するために、ハイデガーはテキストと向かい合う。過去の哲学者や伝統に対するハイ

デガールの関わり方は一様ではないが、ここでは初期ハイデガールの解釈学という方法を理解するために一定の視点から論を進めることにする。

『ナトルプ報告』の中で「解釈」とは「過去を了解しつつ我がものにする」と(GAG: 347)であるといわれており、「解釈学は、唯一、解体と、この方途によつてその課題を成し遂げる」(GAG: 368)とされていることから明らかなように、ハイデガールの解釈学は本質的に過去や歴史性とかかわる考察方法である。すでに述べたように解釈学とは現存在(事実性)という主題を問うための方法であり、この主題の独特の在り方に即した考察方法である。『存在と時間』の序論では、現存在が「自らの過去を存在する」という根本的な歴史性を有しているということがまず概略的に示される。現存在の歴史性のゆえに、存在への問いは「それ自体歴史性によつて性格づけられている」(SZ: 20)であり、また「現存在という」この存在者の最も固有な存在論的照明は、必然的に『歴史学的』解釈になる」(SZ: 39)。そして現存在が歴史的に存在するのは、さしあたりは平均的日常性という状態においてであり、非本来的な、頹落という仕方においてであるため、現存在は「伝統にもたれかかり」、現存在の歴史性は「根のない」ものとなっている。それゆえ存在の意味を問うためには、「固定化した伝統を解きほぐし、その伝統がもたらした閉塞状態を解消する」ことが必要となる」(SZ: 22)のである。つまり伝統の「解体(Destruktion)」が必要となるのである。

『存在と時間』の序論では以上のような仕方で、存在の意味への問いと解釈学的解体との関連性について、現存在の歴史性と非本来的性という在り方に即して論じられている。この関連性は、「現象学」という方法の基本的な発想と「解釈学」とのむすびつきを捉えることで、より鮮明に、具体的に理解することができるようになるだろう。

三 現象学と解釈学

『存在と時間』期までのハイデガーは現象学を自らの方法として積極的に用いていた。『現象学』という名称は、ひとつの格率を言い表わすもので、これを「事象そのものへ」という形でのべることができる」(SZ: 27)。それは「自らを示すものを、それがそれ自身の方から自らを示してくる通りに、それ自身の方から見えるようにすること」(SZ: 34)を意味する。この格率は「当たり前」のことであり「あらゆる学問的認識の原理を言いあらわしただけ」と思われるかもしれないが、実際にはそうではないとハイデガーは言う。

この「当たり前」の格率は、「哲学においてはアリストテレス以来ますます失われてきた」(GAG: 71)のである。たしかにハイデガーの事実性の解釈学が主題とするような生き生きとした「具体的な事象」を伝統的な哲学も研究対象としてきたのかもしれない。しかしそれは、体系化や類型化によつて客観的な知を獲得するという認識

態度においてなのである。ハイデガーは「今日の哲学の理念」を次のように描きだす。「今日の哲学の」態度の根本傾向は、のうちへと秩序づけることであり、つまり、何か具体的なものが認識されるのは、そのうちにそれが属すところ、秩序全体におけるその場所が規定されるときである。或るものが規定されたものとみなされるのは、それが片付けられたときなのである」(GA63, 606)。そこでは問いの主題は伝統的に受け入れられてきた諸々のカテゴリーによって理解される。この主題は、その固有の在り方に応じて、そのもの自身に即して問われるのではない。それは「類型論と秩序づける体系構成とにとって『たんに』材料にすぎない」(GA63, 60)のである。

現象学の格率を实践すること——伝統的な概念の枠組みや習慣的な思考様式に縛られずに、また体系構成や理論による説明を拒否して、「事象そのもの」を端的、直接的に見るということは容易ではなく、誰もが意志しさえできるといってもいい。「事象そのもの」はただ漫然と日常的・習慣的なものの見方をしていただけでは獲得されないのである。それゆえ現象学の祖であるフッサールにおいても、一般定立 (Generalthesis) の遮断という仕方で判断停止 (エポケー) をおこなう「現象学的還元」が、現象学的研究の地盤である純粹意識の領野を獲得するための方法として要請されるのである。要するに、事象そのものを探求するためにはまずその事象が獲得されなければならないことである。ハイデガーは現象学

のこの基本発想を受け継いでいる。もつといえ、それをフッサールよりも徹底して遂行しようとしているのである。そして、事象そのものを獲得するためにハイデガーが採用したのが他ならぬ解釈学なのである。

われわれが伝統的習慣的なものの見方に留まっている限り「事象そのもの」は自らを示さない。『存在論 (事実性の解釈学)』でハイデガーはこのことを次のように表現している。

「事物が自らを・示すのは、伝統によって固定された一つのアスペクトでもありうる。[...] また、それ自身において自らを端的に示すものは、いまだ事象そのものである必要はない。ひとがそれに安んじているかぎり、地盤を設定するさいにすでに一つの偶然的なものを自体的なものと僭称してしまったことになる。ひとは一つの隠蔽態を事象そのものと見なすのである」

(GA63, 75)

事象そのものは隠蔽状態のなかから獲得されなければならない。そのためには「隠蔽の歴史を開示することが必要になる」(ibid.) のであり、伝統の「解体」(Abbau) によつてはじめて「根源的な事象設定が可能になる」(ibid.) のである。そして「解体ということがここで意味しているのは、ある一定の根源的なものがいかにして下落し隠蔽されるにいたったかを見るために、また、われわれがこ

の下落の状態にあることを見るために、ギリシア哲学へ、アリストテレスへと還帰するということである」(GA63, 76)。こゝでハイデガーが特にアリストテレス哲学を重視するのは、それが伝統によって歪められ隠蔽されていく以前の「哲学の原初」⁽⁴⁾だからである。哲学の伝統的な諸概念、たとえば「超時間的なもの」、「理念的なもの」、「一般的なもの」、「経験的なもの」、「主観的なもの」、「個別的なもの」等々、これらはハイデガーによればわれわれにとって「きわめて異質な由来をもった範疇的諸規定」(GA63, 60)なのである。それはわれわれにとっては疎遠なギリシア的な地盤においては事象そのものに即して把握されたもの、すなわち古代ギリシア人の経験にとっては生き生きとした姿で現われていたものから獲得された概念である。われわれはその同じ経験地盤には立っていないのにもかかわらず、「今日の哲学」はギリシア的な概念をもちいてものを考え続けている。それゆえ「今日の哲学の傾向」は「異邦人のプラトニ主義」(GA63, 43)と特徴づけられるのである。

このような概念の典型例として「人間」という概念があげられる。ハイデガーによれば、「人間」という概念の起源はギリシア哲学であり、「人間とはロゴスを持った動物である」という定義は、植物、動物などの諸対象のなかで「言葉をもち」、「話をする」という点で特殊な対象として人間を規定することによって生じたものである。そしてその際、人間は「話をする」という点で種別化されているが対象という点では植物や動物などと同じものとして見られている。

人間の定義は我々を他の対象の中の一つの対象として捉えることによって生じたのである。さらにハイデガーによれば、「ロゴスをもった動物」というギリシア哲学における人間の定義は、「理性的動物」という意味ではない。というのも、「ロゴスはギリシア人の古典的、学問的な哲学(アリストテレス)においては決して『理性』をではなく、話、談話を意味している」(GA63, 21)からである。このように概念の起源へ遡行し、その根源的な意味を再発見することによって、伝統的な範疇的規定にとられずに事象そのものを探求することが可能になる。「解釈学においてはじめて、人間の理念という伝承されてきた手引きなしに徹底的に問うという立場が形成される」(GA63, 17)のである。

事象そのものの探求のためにギリシア哲学へと遡行し隠蔽の歴史の解体する必要がある、つまり現象学は解釈学的現象学でなければならない。このような主張の背景には、次のようなハイデガーの根本洞察がある。

「われわれはそれほど第一義的にまた根源的に対象や事物を見るわけではなく、むしろまずこれらについて語るのである。より詳しく言うと、われわれは見るものを言い表わすのではなく、逆に人が事象について語ることを見るのである」(GA20, 75)。

「事象そのもの」はさしあたり与えられておらず、「事実的な生は

いつも、伝えられてきたか、改作された、あるいは改新された一定の被解釈性 (Ausgelegtsein) の中を動いている」(GA62, 354) のであり、「哲学の対象である存在の存在性格には、自己・隠蔽と自己・覆蔽という仕方において——しかも付随的ではなくその存在性格によって——存在する」ということが属している」(GA63, 76) のである。

『存在論(事実性の解釈学)』においては「今日における現存在」の具体的な分析を通じて示されるこの「被解釈性」という「根本現象」(GA63, 79) は、『存在と時間』においては日常的な現存在の存在構造としてより鋭く捉えられている。『存在と時間』では「解釈」(Auslegung) は、特定の学問的方法や認識態度ではなく、より根源的に、現存在の存在構造として把握されている。それは「了解」を「形成仕上げること」(Ausbildung) を意味しており、あるものがあるもの「として」捉えるという構造をもっている。言明や判断といった理論的認識の態度がとられる以前に、日常的な道具の使用においてもすでに解釈はおこなわれているのであり、たとえば身近なものが「机として」、「これこれの用途のためのものとして」前定的に解釈されている。われわれが関わり合うものはすべて、あらかじめすでに解釈されているのであり、日常的現存在の了解と解釈は「世間話」(Gerede) によって構成されている。われわれはさし

あたりたいていは「世間話の被解釈性」の中を動いているのであり、哲学的探究というものもそのような被解釈性から出発せざるをえない

い。したがって、「あらゆる真正な了解や解釈、伝達、再発見と新しい領得は、この被解釈性のなかで、そのなかから、それに反抗しつつ、遂行されるのである」(SZ, 169)。われわれ自身のこのような在り方のゆえに、われわれに自らを示してくるものは、さしあたりたいていは事象そのものではなく、伝統によって隠蔽された事象であり、したがって伝統の解体としての解釈学という方法が必要なのである。

事実的な生という事象そのものをとらえるためには、伝統の批判的解体としての解釈学的考察が不可欠である。言い換えると、われれにとつての生き生きとした現実をとらえるためには、伝統的・習慣的なものの見方から脱却することが不可欠なのである。そして隠蔽の歴史を開示するという解体作業は、既存の諸概念や言説の起源となる文献を解釈することによってのみ可能なのであるから、事象そのものの探求にはテキスト解釈が必要不可欠であるということになるのだ。われわれは先にハイデガーの解釈学を自己理解の方法として捉えたが、他ならぬ「自己」というものの在り方のゆえに、自己理解はテキスト解釈を必要とするのである。

四 今日のわれわれの状況への解釈学的問い

これまで自己了解とテキスト解釈との関連性という問題に焦点をあわせて、ハイデガー解釈学が何をどのような仕方で問おうとする

方法であるのかを論じてきた。だがこのような考察にはどのような意味があるのか。「ハイデガーが何と言ったのか」を知ること、ハイデガーの思想を理解するということはわれわれにとってどのような意味をもつのか。このような本質的な問いを哲学は避けては通れない。そして本論はまさしくこのような問いについて正面から考えるためにハイデガー解釈学を取り上げているのである。ハイデガー哲学について単に知ること自体は哲学ではないし、ハイデガー解釈学を紹介的に論じることが全く解釈学的ではない。このような言い方は哲学の業界ではもはや常套句であり、陳腐にさえ響くが、しかしそれははっきりと問題とされることは稀である。

解釈学にとって決定的なことはそのつどのわれわれの状況に基づいて哲学するということであり、——ハイデガーの、ではなく——われわれ自身の事実性とその被解釈性を問うということである。ここで問題にしたいことは、諸学門の中に現在の哲学がどのように位置づけられるのかという学問論的考察ではないし、哲学はこうあるべきだという理想の「哲学」を独断的に提示することでもない。ここでの考察はハイデガー解釈学に倣って、現在の哲学の現場において生じていることに批判的な眼差しを向け、今日の哲学の課題を明示化し、解釈学の一つの可能性を提示することを目指している。

では、現在のわれわれの哲学することの状況はどうなっているだろうか。今日、哲学が営まれる中心的な場は大学や学会という組織である。このような世界において哲学するということは、秀でた外

国語能力や文献を正確に読解する能力といった専門技能を必要とされる。また哲学という活動に専門的に従事するということは大学組織の中に所属し続け、「ハイデガー研究」といった類の「看板」を掲げて、研究論文を次々に発表していくことを意味している。そして論文を発表するためには、「人研究」であれ「テーマ研究」であれ、その分野に関する膨大な文献を読み知識を蓄積していくことが必要である。このようにして作られるものは、たいていは文献解釈中心の論文なのである。ますます専門分化し、蛸壺化していく諸学科のなかでの「哲学」、そして理系重視の科学優勢の時代における文系科目の一つとしての「哲学」、——このような一般的状況のなかで、今日の哲学は一部の専門家の間でだけ流通する言語を用いて、特殊な問題関心に基づいた研究活動をおこなっている。「哲学することは生きることである」(vgl. SZ. 402) というハイデガーが好んで引用するヨルク伯の言葉があるが、今日の哲学はますますこのような哲学の理念からは遠ざかっている。哲学の語ることには最後にはいつも「だから何?」という問いにさらされ、「それは自分に何の関係があるのか?」と済ませられてしまうようなものになる⁽⁵⁾。無論哲学に従事する者が本来的に欲しているのは単に或る哲学者や思想家が何と言ったのかを知ることではなく、テキスト解釈を通じて、われわれの生きている現実を理解することであり、人間や世界といった「事柄そのもの」を根源的に把握することであろう。しかし実際にはテキスト解釈と「事柄そのもの」の探求とは乖離があ

とというのが実情なのである。しかもこうしたことが公然の事実とさえなっており、この事態に対応していわゆる「哲学者」と「哲学者」との区別というものが立てられるわけである。⁽⁶⁾

こうして本質的な問題は問われることなく隠蔽される。「哲学すること」と「哲学研究すること」との関係について、前者が本来的であり後者は本質的には価値がない「哲学趣味」であるとか、あるいはそれぞれに固有の意味があるとか、両者は相容れないものではなく真に哲学者であれば哲学研究者であっても構わない云々——このように語られる。この関係性そのものは、問いや考察の主題にはならず、曖昧に各自の経験や価値観にもとづいて断定的に捉えられるだけである。一般に哲学研究論文においては、テキストと執筆者（過去と現在）との間の素朴な一致が前提されているか、あるいはまた、両者の差異が暗々裏に自覚されているが、忠実なテキスト解釈の合間にときおり自らの顔をのぞかせる発言を織り交ぜたり、まるでイタコのようにテキストに仮託して自らの見解を語るといった仕方では、両者の曖昧な関連性が想定されているように思われる。要するに、過去のテキストを読んで解釈するということが現在のわれわれにとってどのような意味をもつかということが不明確なのである、言い換えるとテキスト解釈と自己理解との関係が曖昧なのである。もちろんこの関係は一義的に確定されるものではなく、テキスト解釈の可能性は原理的に読み手の自由に対して開かれている。だが解釈者がその都度どのようにテキストと向き合っているの

かを明示的に示すことは、その解釈の意義を理解可能なものにするためには不可欠であると考えられる。テキスト解釈と「事柄そのもの」の探求との関連性を明確に示し、哲学の一つの可能性を提示するということが今日の哲学の課題なのではないだろうか。

さて本論はハイデガー解釈学を「手掛かりにして」その一つの可能性を示すことを目指している。「手掛かりにして」ということで考えられているのは、ハイデガー解釈学という方法が「普遍性」を有していて、それを今日のわれわれも使用することができるということではない。つまりハイデガーが語ることをそのまま真なるものとみなし、そこから現代でも利用可能な思想を抽出しようとするのではない。すでに述べたように、ハイデガーは伝統による隠蔽の歴史を開示するためにギリシア哲学へと還帰することを解釈学の課題とした。また存在一般の意味を問うための準備的考察として現存在の解釈学を遂行し、現存在の存在を根源的に、また全体として了解することを試みた。解釈学的考察をするとは、アリストテレス研究をするということであり、また存在論をおこなうということなのである。このような研究をわれわれは自らの課題として引き受けるべきなのであろうか。そうすることによって、われわれの事実的な生がよりよく理解されるようになるのだろうか。実際こうしたやり方はハイデガー解釈学の理解としても、われわれ自身の事実性の理解の試みとしても不適切であらう。まずこの点を明らかにし考察の方向性を示すためにも、これまであまり触れてこなかった、「解釈

学」と本質的に関係するもうひとつの方法概念である「形式的告示」について論じることとする。

五 形式的告示と解釈学

「形式的告示」は前期ハイデガーの思索を導く主導的な方法概念であり、『存在と時間』においても術語として論じられることはないが積極的に用いられている。⁽⁷⁾「実存」や「世界内存在」などのハイデガー哲学の術語はすべて形式的に告示されているのである。形式的告示の方法とは、はじめに形式的で内容的には空虚な概念を提示し、それから具体的な考察の遂行過程で徐々にその意味内容を充実させていくというものである。形式的に告示されたものは規定された一般的な意味内容をもつ概念や命題とは異なり、そこからさらに別の概念や命題を分析や演繹によってひきだすことができるような考察の地盤にはならない。しかしそれは「指示的」と「禁止的」機能をもっており、問われているものをあらかじめ空虚にはあるが告示しておくことで、それを事象そのものに即して直観的に充実化する「視線の方向」を「指示」し、また非本来的な理解や伝統的な既成解釈に引きずられることがないよう「禁止的」に導くのである (vgl. GA61, 141)。

「形式的告示は、それが固定された一般的な命題とみなされた

り、また、それが先持とともに構築的、弁証法的に演繹されたり空想されたりするときには、いつも誤解されている。未規定ではあるがなんらかの仕方では理解されうる告示内容から出発して、理解を正しい視線方向へもたらすこと、そのことにすべてがかかっている」(GA63, 80)

興味深いことに、ハイデガーは現象学の「現象」の概念をも形式的告示的に理解している。「現象」とは「自らを示すもの」のことであり、それは「代理」や「間接的観察」、「再構築」されているものではないということの意味する。このような現象概念の理解においては「さしあたり事象内容についてはまったく何も確定されていないし、そのうちには一定の事象領域への指示も存していない」(GA63, 68)。そしてこの場合、「存在者が対象で、あることの本来的ではない仕方、しかし可能的で実際には支配的な仕方を防止するということが共に含意されている」(ibid.)。しかしながら現象学の祖であるフッサールにおいては、「現象」の意味は「領域的なカテゴリー」にまで改変され、「体験」や「意識連関」を意味することになる。「体験としての体験が現象である」(GA63, 72)というわけである。ハイデガーはフッサールに抗して、あくまで「現象」を事象内容については未規定なものとして受け取ろうとする。「『現象』という」この主題的なカテゴリーは、批判的に確定された隠蔽態を解体していく道へ還帰するように見ることを批判的・警告的に導い

ていく、という機能を有している。それは監視的であり、つまりはその警告的機能においてのみ理解され、「領域の」限定としては誤解されているのである」(GA63, 76)。このように形式的告示的に現象概念を理解するということが、「現象学をその可能性において把握する」(GA63, 74)と、いうことに他ならないのである。

われわれに求められるのは、ハイデガーの解釈学を形式的告示的に理解すること、すなわち解釈学をその可能性において把握することではないだろうか。つまり、何が解釈学的考察の対象なのかという「具体的な事象内容」にかんしては未規定なものとしてそれを受け取るということである。ハイデガーが解釈学について述べることを「固定された一般命題」として受け取らず、「事實的な生」への問いを促すものとして、ただそこへ「批判的・警告的に導いていく」ものとして理解するということである。

六 解釈学の可能性

ハイデガーは解釈学的解体の課題を次のように具体化している。「解体ということがここで意味しているのは、ある一定の根源的なものがいかにして下落し隠蔽されるにいたったかを見るために、また、われわれがこの下落の状態にあることを見るために、ギリシア哲学へ、アリストテレスへと還帰するところにある」(GA63, 76)。解釈学的解体がアリストテレス解釈をおこなう理由は、事実

的な生を問うときに、たとえば「人間」や「理性」などの伝統的な哲学の概念が用いられるからであり、それらの概念は古代ギリシアに根を持つからである。解釈学的考察に際して、ハイデガーはじめから哲学の伝統的な基礎概念に狙いをさだめている。しかしわれわれ自身はどうであろうか。われわれは自己自身を「理性的動物」や「主観性」として捉えているのだろうか。このことは「われわれ」ということで誰を指すのかによって、答えが変わってくるだろう。なにもここで哲学は本来「西洋人」のものでありわれわれ「日本人」には疎遠なものであるというお馴染みの議論をしたのではない。もっと徹底的に「事実性」という現象の意味を捉えたと、「西洋」や「日本」といった一般的抽象的な区分が意味をなさない地点にまで至るのである。「事實的な生」とはわれわれ一人ひとりの各自的な生のことであるが、各自はそれぞれ異なる環境のなかで生き、異なる経験を積みながら生きている。各自の内面の私秘性ではなく、各自の状況の特殊性のゆえに、事實的な生はその固有の在り方において捉えられなければならない。たとえば、上述の問題についていえば、大学の哲学科で学んだ者や哲学書に親しんでいる一部の知識層にとってはハイデガーの指摘は妥当するかもしれない。しかし義務教育段階で就学を終え仕事にいたり、高等学校で選択科目「倫理」を履修しなかったようなひととは哲学の基礎概念に触れずに生きてくるのであり、「彼ら」は自己理解の際に哲学の概念を用いたりしないはずである。それぞれの人がどのような被解釈性の中で生

きているのかということは同じ時代、同じ文化圏であっても大きく異なる。個々人のキャリア、生の履歴の違いによって、彼にとっての伝統は異なるのである。このような差異を昂進させる一般的な状況として、メディアや情報伝達技術の発達ということがあるだろう。同じ地域に暮らしていても、全く異なる経験を積み異なる文化的歴史的な流れの中を生きているということがありうる。このような状況はハイデガーが生きていた時代とわれわれの時代とは異なっている。われわれの生きる現実とは、たとえば古代ギリシア以来脈々と続く西洋哲学史といった一本の大きな歴史の流れではとらえられないはずである。ハイデガー解釈学の「限界」ないし「前提」は、平均的被解釈性が共通の根をもっており、それが哲学の言説であると捉えたこと、しかもその際に歴史というものが、古代ギリシアから中世を経て近代（デカルト、カント等）へと単線的に繋がっている哲学史の大きな流れとして捉えられていることである。

われわれの被規定性の地平は見通せないほど広がっており、ひとの事実性を構成するものが何であるのかは必ずしも明らかではない。自らが属しており暗黙のうちに影響を受けている伝統が何であるのかを知ること、自らの「前提」に気づくことは容易ではない。しかし形式的告示的な解釈学というものは、本来そのような多様性を許容し、広範な射程をカバーすることができると思考様式なのである。ハイデガー解釈学をその可能性において受け取るということが意味するのは、ハイデガーに倣って哲学の古典を研究すればよいという

ことではない。解釈の対象の具体的内容は「未規定的」なのであり、その実質は実際の解釈学的考察の遂行においてのみ充実されうるのである。解釈学的考察を実践しようとする際には、どこを自らの過去として見定めるべきかということ、何が彼を現実的に規定しており、どのような被解釈性のうちを生きているのかを開明することが、最初の大きな問題として生じる。とはいえ決定的な指示はすでに与えられている。解釈の端緒となるのは「今日の被解釈性」であり、「あらゆる真正な了解や解釈、伝達、再発見と新しい領得は、この被解釈性のなかで、そのなかから、それに反抗しつつ、遂行されるのである」(SZ, 169)。

では今日のわれわれの平均的な被解釈性はどのようなになっているのか。われわれは自らをどのようなものとして理解しているのだろうか。「生きる」ということ「人生」についてどのような考え方が流布し、常識として作用しているのか。われわれは子供のときから大人に「将来何になりたいの?」と度々聞かれる。答えは「サッカー選手」でも「お医者さん」でも何でもよいが、求められていることは特定の職業を答えることである。特定の職業につき、何かを「やる」こと、「成し遂げる」こと、そのようなことが生きる目的であり、そのような「夢をもつこと」がよいことであるとされている。生は、社会の中での「役割」として、「事業」として把握されている。この被解釈性は学校教育において強化され完遂される。たとえば旧文部省が策定した「教育改革プログラム」(一九九七)において、「子

どもたちに『ゆとり』の中で『生きる力』をはぐくむ」、「心の教育の充実」の重要性が指摘されている。しかしこの「教育改革プログラム」は経済界からの要望を受けて改訂されたものであり、その冒頭では「目前に迫った二一世紀において、世界的な大競争時代の中で、我が国が活力ある国家として発展し、国際社会に貢献できる科学技術創造立国、文化立国を目指していくためには、あらゆる社会システムの基盤となる教育の役割が極めて重要である」とされ、「情報化や経済のグローバル化が一段と進むことが予想される二一世紀を生きる子どもたちに必要な能力を身に付けさせることも今日の教育の重要な課題である」とされている。つまり、そもそも「生きる力」とは、自由競争の原理にもとづく教育改革というプログラムのなかで提言されたのであり、企業の人材要求に応じるような教育方針といえるのである。二〇〇八、二〇〇九年の学習指導要領改訂では「ゆとり」に関しては除外されるが「生きる力」の理念はあらためて掲げられている。二〇一二年に施行された新学習指導要領の第一章総則には「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指す」と明記されているのである。これからの教育は「ゆとり」でも「詰め込み」でもなく、変化の激しいこれからの社会において必要となる「生きる力」を育む、というわけである。現代において生きるということは、競争社会の中で抜kindでた「役割」を果たし、様々な「スキル」を身につけ、自らの「能力」を開発していくということなのである。

このような今日の被解釈性の根をたどり、それを隠蔽の歴史として批判的に解体していく解釈学的考察の可能性がある。このような被解釈性が事実的な生に即して、その生をありのままにとらえようとする試みから生じたものであるとは到底考えられない。われわれの生とは、本来このような今日の被解釈性によって把握されるべきものではなく、われわれの自己理解はこの被解釈性によって歪められ隠蔽されることで窒息し閉塞状態に陥っているのかもしれない。その隠蔽の歴史を開示する解釈学的考察を具体的に遂行するうえで次に問題となるのは、今日の被解釈性をどのような歴史の流れにおいて捉えるのかということ、そしてその際参照されるべきテキストは何かということである。それは少なくとも文献研究の対象としてのいわゆる古典に限定されず、ここで例示したような文科省発行の文書や、経団連の提言書などを含むことになるだろう。ハイデガー解釈学の事実性への問いをわれわれの状況において引き受けるといふことは、日常的で卑近な言説や学校教育などの制度、現代の政治的・経済的な状況へと眼差しを向けることを必要とするのである。ここではあくまで今日における解釈学的考察の可能性を一例として問題提起的に示したにすぎないが、このような研究には自己理解とテキスト解釈との生き生きとした関係性が認められるはずである。ハイデガー解釈学それ自体を解釈学的に解体しつつ形式的告示的に理解し、またそこから現在のわれわれの状況へと批判的に目を向けるという指示を受け取ることで、解釈学を可能性として、われわれ

自身の課題として把握することができるようになるのである。

二年、8頁。

注

- (1) 高橋哲哉「テクストの解釈学 エクリチュール・モデルの意味するもの」、『現象学と解釈学（上）』、世界書院、一九八八年、参照。
- (2) 『存在と時間』（*Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 2001）からの引用は、略号SZおよび頁数によって本文中に表記する。
- (3) 『ハイデガー全集』（Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, 1975-）からの引用は、略号GAおよび巻号・頁数によって本文中に表記する。
- (4) Günter Figl, Martin Heidegger zur Einführung, Junius Verlag GmbH, Hamburg, 1992, S.27-28.
- (5) 竹田青嗣『自分を知るための哲学入門』、筑摩書房、一九九三年、11頁、参照。
- (6) 中島義道『哲学の教科書』、講談社、二〇〇一年、270頁、参照。
- (7) 本論はハイデガー解釈学をあくまで事実的な生を主題とする方法として理解し、伝統の批判的解体という側面に焦点をあわせた考察をおこなっている。そのため「形式的告示」の概念についても限定的な言及しかできなかった。しかし、ハイデガーにおける解釈学と形式的告示は非常に広い射程をもっていることも事実であり、たとえばハイデガーの解釈学を「事実的生の分析や現存在の実存論的分析の方法にとどまらず、西洋哲学史全体に対するハイデガーの批判的思考を特徴づける総称」ととらえる最近の研究がある。この論者によれば、「解釈学は、初期以来の現象学の受容と批判、また『存在と時間』以後の超越論哲学の受容と批判、そして前期の思想に対する自己批判としての「転回」の思考、これらすべてに通底する根本的な思考様式として考えなければならない」（斉藤元紀『存在の解釈学 ハイデガー「存在と時間」の構造・転回・反復』、法政大学出版局、二〇一